学校生活への青年の適応の問題(*)

(2)

大西誠一郎　久世敏雄*　田中鉄也**
加藤隆勝***　三輪弘道****

I 問　題

本研究は，はじめ，次のような2つの問題を解明しようとしてはじめられた。すなわち，

(1) 現代の中学，高校の生徒は，学校生活の中でどのような点に問題を感じているか。いわば，なにに悩み，なにに困っているか。

(2) そして次には，そのような問題点に関して，生徒たちはどのような姿勢をとり，どう対決しようとしているのか。したがってそれが，青年の人格形成の上にどのように影響するのだろうか。

以上の問題のうち，第1のものはすでに報告したが，(注1) そこでは，中学，高校を通じてもっとも多くのものが訴えている悩みの問題を取り出すことができた。そして，現代の学校生活の中で，かれらが訴えている悩みの問題は，中学，高校，男女を通じてほぼ共通しており，また逆に，悩みとならない問題もきわめて共通したものであることが明らかになった。もちろん部分的には，中学，高校により，あるいは男女間に幾分差異は認められたけれども，一般的にはきわめて共通した悩みをもっていることが明らかになった。かれらが，第1に訴えている問題は，〝学校生活〟に関するものであり，次いで多いのは，〝人生・社会〟の領域に関する問題であった。そこで本年度は，それらの中から，10個の問題（調査用紙参照）を取り出し，研究の出発点とした。そして本報告では，次の3点を明らかにしようとしている。すなわち，

(1) 悩みを感じている問題の重大さの順位。10個の問題だけを取りあげた場合，かれらはその問題の中，どれを重大だと考え，またどの問題は重大だと考えないかを知ろうとする。もちろんこのことは，第1報告において一般的に取りあげられたことであるが，第1報告では，32個の問題を提示して選択させたのである。今回はその中とくに10問題だけを取りあげたので，その範囲においてどのように重大さを意識しているかを調査することにした。

(2) 第2は，悩みの解決の仕方。悩みを感じ困っている問題に対して，かれらはどのように解決をしようとしているのか。その解決の仕方は，問題により，あるいは中学，高校，男女さらに学校種別によっても異なるであろうが，その点を明らかにしたい。

(3) 第3には，ある問題を重大だと考えることと，その問題をどう解決するかという解決の仕方との間に，どのような関係があるかを明らかにしたい。

本報告では，以上の三点を目ざしているが，これらの問題が，個々の青年の人格形成の上にどのように影響しているかについてはふれることができない。どのような問題について悩み，それをどのように解決しようとしているかの点については，解明することができたけれどもさらに一歩進んで，人格形成の上にどう影響しているかについては，また別の研究計画について検討されねばならない問題である。

II 研究法

1. 質問作成の手続き

本研究は，前の研究と同様，質問紙調査法によることにした。検討すべき問題点は上に記したとおりであるが，10個の問題に対する解決の仕方を検討するために，

*　名古屋大学教養部
**　静岡大学教育学部
***　文部省初等中等教育局
****　名古屋女子大学
(*)　昭和39，40年度，東大教授依田新氏を代表者とする文部省科学研究費による綜合研究の一部。

注1　大西誠一郎，久世敏雄，田中鉄也，加藤隆勝，三輪弘道　学校生活への青年の適応の問題 (1)　名古屋大学教育学部紀要　第12巻　1965

中学2年，高校2年それぞれ50名を対象として予備調査を行なった。すなわち，それぞれ10個の問題について，〝現在悩んでいるならどのように解決しようとしているか〟，また〝現在悩んでいなくても，将来そのような問題について困るようなことがおこったら，どのように解決するか〟を自由記述によって回答させた。その結果は問題によってかなりまちまちであったが，一貫して1つの傾向が認められた。すなわち，問題を主体的に自分の力で解決しようとするか，あるいは他人に相談して解決しようとするか。さらに，具体的に解決しようとする意欲を失ってあきらめるか，それともさらに，その問題は自分の責任ではないとして回避的な態度をとるかのいずれかに分類することができた。したがって，解決の仕方としては，各問題を通じて次のような4つの型に分けることにした。

解決の仕方

i．自分で解決する

ii．他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する

iii．あきらめる

iv．自分の責任ではない

ここで〝あきらめる〟という態度と，〝自分の責任でない〟という態度とには，共通した部分のあることも考えられる。しかし〝あきらめる〟というのは，そこに至るまでに自分なりに積極的な努力をしてきたことがかくされているのである。自分の力で解決しようとしたか，あるいは他人に相談したか，とにかく解決への努力をしたのである。ただそれが効を奏さなかったために道は開けず，解決への意欲を失ったのである。それに反し，〝自分の責任でない〟というのは，自分で解決しようとする努力は早く姿を消し，自分はその問題の圏外に立っている態度だということができる。もちろんその過程には，解決しようとする時期があったかも知れないけれども少なくとも現在の場面においては，自分はその圏外に立ち，それはひとごとだという気持のうかがえる態度である。

以上のようにして得られた調査用紙は，次に示すとおりである。

調　査　用　紙

調　査　AD—II

名古屋大学・静岡大学・岐阜大学

学校　学年　組　番　氏名　　男・女

これから，みなさんに学校生活についていろいろ質問しますから，できるだけ正直に答えて下さい。

I　あなたは学校生活について，いろいろ困ったりなやんだりすることがあるでしょう。つぎに，あなたが困ったりなやんだりすると思われることを10あげました。これらの10の問題について困った場合，あなたにとって，どの問題がもっとも重大な問題ですか。もっとも重大だと思う問題から順に，1，2，3…10番まで問題の左側にある空欄にその番号をつけて下さい。

順位	困った問題
	上手な勉強の仕方がわからなくて困った場合
	成績の悪い科目があって困った場合
	勉強する気になかなかなれなくて困った場合
	先生の指導の仕方について納得しにくいことがあって困った場合
	ホームルームがつまらなくて困った場合
	先生と十分に話しあうことができなくて困った場合
	将来どういう方向へ進んだらよいかわからなくて困った場合
	異性の友だちがなかなかえられなくて困った場合
	人生いかに生くべきかよくわからなくて困った場合
	大人の社会は矛盾にみちており，不合理なことが多くて困った場合

II　つぎに，あなたが困ったりなやんだりすると思われることを，前の問題と同じように10あげました。これらの10の問題について困った場合，あなたは，それをどのように解決しますか。それぞれの問題について解決の仕方を4通りづつかきましたので，おのおのの問題について，あなたが解決しようとする仕方にもっともあてはまると思う

番号に，一つづつ○印をつけて下さい。また，ii）に○印をつけた人は，（　）の中の人にも○印をつけて下さい。

1．上手な勉強の仕方がわからなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

2．成績の悪い科目があって困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

3．勉強する気になかなかなれなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

4．先生の指導の仕方について納得しにくいことがあって困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない（先生の指導の仕方が悪いからだ）

5．ホームルームがつまらなくて困った場合
　i）できるだけ自分たちで解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

6．先生と十分に話しあうことができなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない（先生の責任だ）

7．将来どういう方向へ進んだらよいか，わからなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

8．異性の友だちがなかなかえられなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決する
　ii）他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決する
　iii）やむをえないと思ってあきらめる
　iv）自分の責任ではない

9．人生いかに生くべきかよくわからなくて困った場合
　i）できるだけ自分で解決するよう努力する

ii) 他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決するよう努力する
iii) やむをえないと思ってあきらめる
iv) 自分の責任ではない

10. 大人の社会は矛盾にみちており，不合理なことが多くて困った場合
i) できるだけ自分で解決の方法を考えてみる
ii) 他人（親・友だち・先生・その他）に相談して解決の方法を考えてみる
iii) やむをえないと思ってあきらめる
iv) 自分の責任ではない（大人の社会が悪いからだ）

2. 整理の観点ならびに調査対象・調査期日

(1) 整理の観点

上述のように，10個の問題に対して，中学，高校生がどのようにその重大さを順位づけているのか，また，それらの問題に対してどのような解決の仕方をしようとしているのかを明らかにしようとしたのであるが，それを考察するために，次のように整理し考察することにした。

(a) 中学，高校，学年，男女ごとの比較
(b) 学校種別間における解決の仕方の比較

(2) 対象

対象としては，(a) 学年の進行に伴なう変化を見るために，まず中学1，2，3年，高校1，2，3年をえらび，(b) 学校種別における解決の仕方を比較するためには，とくに高校2年を対象とした。そして，普通課程の高校と工業高校，定時制高校生徒を対象とし，さらに，同じく普通課程の高校にあっても，いわゆる一流校として進学率の高い高校と，それと対照的に進学率の低い高校とを対象とした。それらを一覧にして示すと，Table 1のようである。

(3) 調査期日

予備調査　1965年9月
本調査　1965年12月

Table 1　調　査　対　象

	地域	校種	1年 男	1年 女	1年 計	2年 男	2年 女	2年 計	3年 男	3年 女	3年 計	計 男	計 女	計 計
高校	岐阜市	普通課程				101		101				101		101
		工業高校				211		211				211		211
		定時制				54	99	153				54	99	153
		女子商業					203	203					203	203
	浜松市	普通課程 K				256	51	307				256	51	307
		普通課程 M				203	54	257				203	54	257
	名古屋市	普通課程 A	81	30	111	75	32	107	64	45	109	220	107	327
		普通課程 F	88	49	137	60	43	103	59	38	97	207	130	337
	高校計		169	79	248	960	482	1,442	132	83	206	1,252	644	1,896
中学	名古屋市	K 校	41	34	75	40	38	78	42	35	77	123	107	230
		F 校	48	39	87	52	38	90	50	36	86	150	113	263
	中学計		89	73	162	92	76	168	92	71	163	273	220	493

Ⅲ　結果とその考察

1．悩みの問題に対する重大さについて

悩みを感じている問題10個に対して，重大だと思うものから順に1，2…9，10と順位づけることを求めた。そしてまずここでは，それぞれの問題を，1位，2位，3位と順位づけたものの比率を求めることにした。以下その結果について考察しよう。

(1)　中学・高校・男女別比較

前述のように，それぞれの問題を，1位あるいは2位3位と順位づけたものをまとめて，その平均の比率と，その検定結果とを中学・高校・男女別に示すと，Table 2　(a)，(b)のようである。

Table　2　　中学・高校・男女別比較（悩みの問題に対する重大さ）

(a)　悩みの問題に対する重大さ（1，2，3位としたもの）（%）　　(b)　検定結果 (＜，P＜0.05　≪，P＜0.01)

問　　題	中学男子 N＝273	中学女子 N＝220	高校男子 N＝427	高校女子 N＝237	中　学 男一女	高　校 男一女	男 中学一高校	女 中学一高校
1.上手な勉強の仕方	53.8	75.0	44.0	46.0	≪		≫	≫
2.成績の悪い科目	62.6	70.5	52.9	65.4	＜	≪	≫	≫
3.勉強する気になれない	59.3	68.6	62.8	75.1	≪	≪		＜
4.先生の指導の仕方	22.3	17.3	10.5	5.5		＞	≫	≫
5.ホーム・ルーム	8.1	8.2	10.5	8.4				
6.先生との話し合い	10.6	8.2	4.4	4.2			≫	
7.将来の方向	31.1	19.5	49.9	46.0	≫		≪	≪
8.異性の友だち	7.0	5.9	8.9	2.1		＞		＞
9.人生の生き方	23.8	12.7	36.5	31.2	≫	＞	≪	≪
10.大人の社会の矛盾	20.1	17.7	17.6	16.5				

これらの結果から，次のようにいうことができる。

中学，高校を通じて，全般として認められる傾向は，次のようである。

(a)　中学，高校を通じて，ともにもっとも重大だと考えている問題

1．上手な勉強の仕方
2．成績の悪い科目
3．勉強する気になれない

中学，高校を通じて，比較的重大だと考えられていない問題

5．ホーム・ルーム
6．先生との話しあい
8．異性の友だち

1，2，3の問題は，直接学習に関連するものであるが，これらの問題が，現代の中学，高校生にとってもっとも重大なものとして意識されていることは，一つの大きい特長であるといえる。

(b)　次に，中学，高校における男女をそれぞれ比較すると，

中学，高校ともに女子の方がより重大な問題だと考えているもの

2．成績の悪い科目
3．勉強する気になれない

それとは逆に，男子の方がより重大な問題だと考えているもの

7．将来の方向
9．人生の生き方

女子は比較的学習に関連する問題に集中するが，男子は将来の方向や，人生の生き方など，より広い領域に関心をもっているといえる。

(c)　中学と高校とを比較した場合，中学においての方がより重大だと感じている問題と，逆に，中学よりも高校へ進むにつれてより重大だと感じている問題とがある。そしてこの傾向は，男女ほぼ共通している。

中学においての方がより重大だと感じている問題

1．上手な勉強の仕方
2．成績の悪い科目
4．先生の指導の仕方

高校へ進むにつれてより重大だとされる問題

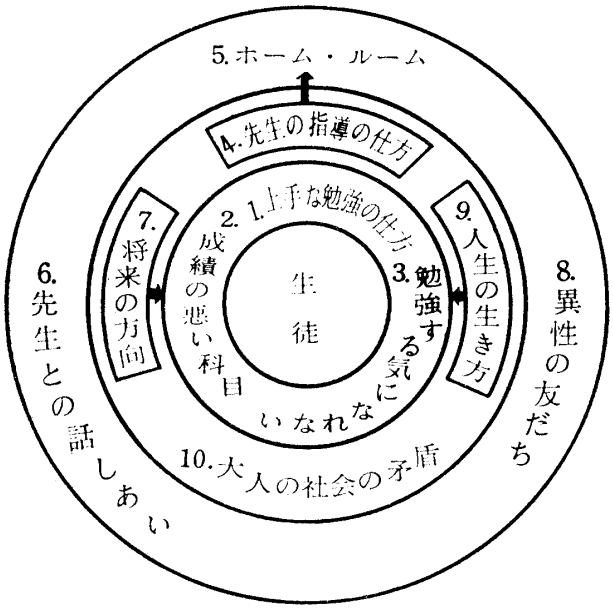
7．将来の方向

9．人生の生き方

中学生にとっては，将来の方向や，人生の生き方などの問題はまだ距離のあることがらであるが，高校生にとっては，それが比較的身近かなものとして意識されるようになって来たことを示すものといえよう。

上述の関係の中，中学，高校の分を比較して示すと，図1のようになる。

図1　悩みの問題に対する重大さについて
（中学らか高校への変化）



備考

1．図の中心に近い領域は，重大さを感じる程度の強いもの。円の周辺のものは，重大だと感じる程度の弱いもの。

2．→印は，中学から高校へ進むにつれて重大だと感じる程度の変化するものとその方向，たとえば，7．将来の方向の問題は，中学では重大さの点で中間に位置しているが，高校へ進むにつれて，より重大なものとして意識されるようになったことを示す。

(2) 中学・高校・学年・男女別比較

次に，学年，男女別に比較しよう。ここでも，10個の問題それぞれに対して，1，2，3位に順位づけたものをまとめて，その平均の比率と検定結果とを示すことにする。Table 3，(a)，(b)

(a) 学年，男女別を通じてみると，さきに，中学，高校で男女をまとめて述べたものと類似した傾向がみられる。すなわち，1．上手な勉強の仕方や，2．成績の悪い科目，3．勉強する気になれない，といういわゆる直接学習に関連する問題は，中学，高校，各学年，男女とも共通に重大だと考えている問題であるといえる。ただ，その重大さを感じる程度は，中学，高校とも，男子よりも女子の方がいっそう強い傾向がみられる。

(b) 次に，比較的重大だとされない問題も，ほぼ共通している。すなわち，5．ホーム・ルームの問題，6．先生との話しあい，8．異性の友だちが得られない，などの問題は，各学年，男女とも，比較的重大だとされていないものである。

(c) 次に，学年が進むにつれて，重大さの減少する問題は，中学男子にあっては，4．先生の指導の仕方の問題と，6．先生と話しあうことができないという問題であり，中学女子では，4．先生の指導の仕方と，6．先生と話しあうことができない，という問題である。中学生が，学年が進むにつれて，先生との関連によって生

Table 3　中学・高校・学年・男女別比較

(a) 悩みの問題に対する重大さ（%）　(b) 検定結果

	問題番号	中1 N=89	中2 N=92	中3 N=92	高1 N=169	高2 N=135	高3 N=123	中1-中2	中2-中3	中1-中3	高1-高2	高2-高3	高1-高3
男	1	48.3	54.3	58.7	46.7	48.1	35.8					>	>
	2	58.4	60.9	68.5	56.8	54.5	45.5						>
	3	55.1	57.6	65.2	69.2	63.0	53.7						≫
	4	24.7	22.8	19.6	10.7	8.1	13.0						
	5	10.1	12.0	2.2	10.1	12.6	8.9		≫	≫			
	6	18.0	6.5	7.6	2.4	6.7	4.9	≫		≫	<		
	7	29.2	28.3	35.9	43.2	51.9	56.9						≪
女	8	6.7	8.7	5.4	7.7	9.6	9.8						
	9	28.1	22.8	20.7	30.1	36.4	43.9				<	≪	≪
	10	21.3	21.7	17.4	17.2	11.9	24.4					≪	

	問題番号	中1 N=73	中2 N=76	中3 N=71	高1 N=79	高2 N=75	高3 N=83	中1－中2	中2－中3	中1－中3	高1－高2	高2－高3	高1－高3
女	1	72.6	76.3	76.1	46.8	49.3	42.2						
	2	67.1	68.4	76.1	60.8	69.3	66.3						
	3	67.1	72.4	66.2	74.7	73.3	77.1						
	4	23.3	17.1	11.3	7.6	2.7	6.0			≫			
	5	9.6	7.9	7.0	11.4	9.3	4.8						
	6	11.0	10.5	2.8	2.5	6.7	3.6		>	≫			
	7	23.3	14.5	21.1	35.4	54.7	48.2				≪		
子	8	2.7	7.9	7.0	2.5	1.3	2.4						
	9	13.7	9.2	15.5	36.7	21.3	34.9				≫	<	
	10	16.4	17.1	19.7	22.8	12.0	14.5				>		

じる問題が重大さを失って来ることは，注目されねばならない。

(d) 高校生については，学年が進むにつれてその重大さが減少する問題は，1．上手な勉強の仕方，2．成績の悪い科目，3．勉強する気になれない，という問題である。それら3問題は，全体の中ではなお重大な問題として意識されているのであるが，学年が進むにつれてむしろその重大さは減少して行く。それに反し，高校男子にとって，その重大さの増す問題は，7．将来の方向や9．人生の生き方に関する問題等である。高校生男子にあっては，学習に関することはなお重大な問題であるけれども，人生や将来の問題は，それらに劣らず重大さを増して来るのである。自分の問題を，さらに広い視野に立って眺めようとする態度が，しだいに開かれて来つつあるといえる。

(3) 学年別順位相関

次に，10個の問題について，重大さを感じる程度が，学年別にどのように関連するかをみるために，その順位相関を求めた。ただこの結果は，1位に順位づけられたものには1点，2位に順位づけられたものには2点，以下，3，4…9，10点を与え，その平均値をもって重大さの順位とした。Table 4

Table 4　学年別順位相関

中2	中3	高1	高2	高3	
.99	.98	.90	.92	.86	中1
	.82	.88	.88	.82	中2
		.92	.92	.87	中3
			.98	.97	高1
				.98	高2

注　この表において，.82のものは，.92以上のものとの間に，.86～.88のものは，.97以上のものと.90，.92のものは，.97以上のものとの間に，それぞれ5％以下の危険率で有意差がある。

この結果でみられるように，その相関はともに有意であり，相互にかなり高い値が認められる。ただ，中2の相関は，中1に対する以外，他の学年との間にはやや低い傾向が認められる。昨年度の報告において[注1]，悩みを訴えるという点からは，中2と中2との間に一つの断層があることを指摘したが，今回の結果もそれと関連があるのかも知れない。しかし，その点については，これ以上説明しうる資料はない。

2. 悩みの解決の仕方

悩みの解決の仕方は，前述のように4つの型にわけて回答を求めた。すなわち，i，自分で解決する，ii，他人に相談して解決する。iii，あきらめる，iv，自分の責任でない，の4つである。中学，高校生が，悩み困っているそれぞれの問題に対して，どのような態度で解決しようとしているかが問題である。以下，結果を考察しよう。

(1) 悩みの解決の仕方の中学・高校別比較

(a) 悩みの解決の仕方を，中学，高校別（学年，男女を合して）に比較してみよう。Table 5 (a) (b)

その結果によってみると，中学，高校では，やや異なった傾向が認められる。すなわち，中学生は，i，自分で解決する，というのが41％であるのに対し，ii，他人に相談して解決する，というのが42.6％である。ところが，高校生では，i，の態度のものが42.4％であるのに対し，ii，の態度のものは37.1％と減少している。悩み困った問題に直面して，中学生はそれを自分で解決するとともに，その程度以上に他人に相談して解決しようとし，高校生はより多く自分で解決しようとする態度を示

Table 5　(a) 解決の仕方の中学・高校別比較（%）

学校 / 解決態度 / 問題番号	中学 N=493					高校 N=664				
	i 自分で解決する	ii 他人に相談する	iii あきらめる	iv 自分の責任でない	NR	i 自分で解決する	ii 他人に相談する	iii あめらめる	iv 自分の責任でない	NR
1	42.4	54.6	2.8	0	0.2	54.5	42.9	2.4	0.2	0
2	59.4	32.0	7.9	0.2	0.4	69.6	24.1	6.0	0.3	0
3	71.2	21.7	5.9	0.8	0.4	75.7	15.6	8.1	0.3	0.3
4	13.4	66.0	11.1	7.9	1.6	13.0	56.0	20.2	9.6	1.2
5	47.1	27.8	17.6	5.1	2.4	35.6	26.2	31.0	6.0	1.2
6	35.5	36.3	18.1	3.7	4.5	25.8	36.9	31.3	3.6	2.4
7	36.2	59.5	1.4	0.4	2.4	36.1	62.3	0.8	0.3	0.5
8	49.3	25.6	15.4	3.9	5.9	45.3	20.2	27.4	4.5	2.5
9	34.1	57.8	4.3	1.6	2.2	45.9	50.3	3.3	0	0.5
10	21.9	42.5	14.0	20.0	1.6	22.1	36.6	27.1	13.7	0.5
計平均	41.0	42.6	9.9	4.4	2.2	42.4	37.1	15.8	3.9	0.9

(b) 解決の仕方の検定結果

学校 / 解決態度 / 問題番号	中学					高校				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1		* *				* *				
2		* *				* *				
3		* *								
4		* *						* *		
5	* *							* *		
6	* *							* *		
7										
8		*						* *		
9		*				* *				
10		*		* *				* *		
計平均		* *						* *		

備考 1. 中学の側にかかれている *, **印は，中学が高校にくらべて，当該問題の選択肢を有意に多くえらんだことを示し，反対に，高校の側にかかれている *, **印は，同じく高校が中学にくらべて有意に多くえらんだことを示している。
2. *, P<0.05
**, P<P0.01

すのである。

次に，iii，のあきらめる，という態度は，高校生にあっては平均15.8%を占めている。これは中学生とは明らかに異なった解決の態度である。

(b) 次に，問題別にみると，解決の仕方は問題によってかなり異なったものであることがわかる。

高校生がより多く i，自分で解決しようとする問題

1. 上手な勉強の仕方
2. 成績の悪い科目
9. 人生の生き方

中学生がより多く i，自分で解決しようとする問題

5. ホーム・ルーム

6. 先生との話しあい

中学生がより多く ii，他人に相談して解決しようとする問題

1. 上手な勉強の仕方
2. 成績の悪い科目
3. 勉強する気になれない
4. 先生の指導の仕方
8. 異性の友だち
9. 人生の生き方
10. 大人の社会の矛盾

高校生がより多く iii，あきらめの態度をとる問題

4. 先生の指導の仕方
5. ホーム・ルーム
6. 先生との話しあい
8. 異性の友だち
10. 大人の社会の矛盾

高校生には，あきらめの態度が強く表われているが，それは従来の学校生活の体験から出てきたものであろう

Toble 6　(a) 悩みの解決の仕方の男女別比較：中学

問題番号＼解決態度＼男女	男子 N=273					女子 N=220				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1	44.3	52.4	3.3	0	0	40.0	57.3	2.3	0	0.5
2	59.7	29.3	10.3	0.4	0.4	59.1	35.5	5.0	0	0.5
3	70.7	21.2	7.3	0.7	0	71.8	22.3	4.1	0.9	0.9
4	14.3	60.8	13.2	11.0	0.7	12.2	72.4	8.6	4.1	2.7
5	51.6	19.8	21.2	5.9	1.5	41.4	37.7	13.2	4.1	3.6
6	36.6	33.7	22.3	2.9	4.4	32.1	44.1	12.7	4.5	4.5
7	41.4	55.3	1.5	0.4	1.5	29.9	64.7	1.4	0.5	3.6
8	50.2	22.3	18.7	4.8	4.0	48.2	29.5	11.4	2.7	8.2
9	37.7	51.2	5.5	1.8	0.7	29.5	62.3	2.7	1.4	4.1
10	25.5	35.7	18.2	20.1	0.4	17.3	50.9	8.6	20.0	3.2
計平均	43.2	38.5	12.2	4.8	1.4	38.3	47.7	7.0	3.8	3.2

(b) 悩みの解決の仕方：中学：検定結果

問題番号＼解決態度＼男女	男子					女子				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1										
2										
2										
4				＊＊			＊＊			
5	＊		＊				＊＊			
6			＊＊				＊			
7	＊＊						＊			
8			＊							
9										
10	＊		＊＊				＊			
計平均	＊＊		＊＊				＊＊			

備考　男子の側にかかれている ＊，＊＊印は，男子が女子にくらべて，当該問題の選択肢を有意に多くえらんだことを示し，反対に，女子の側にかかれている ＊，＊＊印は，同じく女子が男子にくらべて有意に多くえらんだことを示している。Table 7 の検定結果も，同様である。

し，他方では，それらの問題の解決があまりに困難であって，自分の努力だけではどうにもすることのできないことを知るようになってきたからであるかも知れない。

(2) 悩みの解決の仕方の男女別比較

悩みの解決の仕方を，中学，高校それぞれ男女別に比較しよう。Table 6，7

(a) まず，全体としての傾向をみると，男子と女子とでは，中学，高校において，その解決の仕方にかなり差異のあることが見られる。

すなわち，男子にあっては，中学，高校とも，ii，他人に相談して解決しようとするよりも，i，自分で解決しようとする態度がより顕著である。それに反し，女子では，中学，高校とも，自分で解決するよりも，他人に相談して解決しようとする態度がより顕著であることがわかる。男子はより自主的であり，女子は，困った問題の解決に際して，より依存的であるという傾向が認められる。

また，全体として男子に顕著な傾向は，中学男子にあっては，iii，あきらめる態度が顕著であり，高校では，同じく男子に，iv，自分の責任でない，とする態度が著しく表われることである。男子は女子に比して，中学の段階では，あきらめる態度がより強く，高校になると，

Table 7　(a) 悩みの解決の仕方の男女別比較：高校

問題番号＼解決態度＼男女	男子 N=427					女子 N=237				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1	58.3	38.3	3.3	0.2	0	47.7	51.5	0.8	0	0
2	71.2	21.1	7.3	0.5	0	66.7	29.5	3.8	0	0
3	77.3	12.6	9.4	0.5	0.2	72.6	21.1	5.9	0	0.4
4	14.1	50.8	21.1	12.9	1.2	11.0	65.4	18.4	3.8	1.3
5	31.3	27.6	31.4	8.4	1.4	43.3	23.5	30.3	1.7	1.2
6	26.5	34.7	31.9	5.2	1.8	24.5	40.9	30.4	0.8	3.4
7	39.7	58.8	0.9	0.5	0.2	29.5	68.8	0.4	0	1.3
8	50.2	19.1	24.7	4.0	2.1	36.3	22.4	32.5	5.5	3.4
9	47.7	48.2	3.7	0	0.5	42.9	54.2	2.5	0	0.4
10	22.4	32.2	26.6	18.4	0.5	21.8	44.5	27.7	5.5	0.4
計平均	43.9	34.3	16.0	5.0	0.8	39.6	42.2	15.3	1.7	1.2

(b) 悩みの解決の仕方：高校：検定結果

問題番号＼解決態度＼男女	男子					女子				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1	**						**			
2							*			
3							**			
4				**			**			
5				**		**				
6				**						
7	**						*			
8	**							*		
9										
10				**			**			
計平均	**			**			**			

さらに自分をその圏外において，自分の責任でないとする回避的な態度が特長あるものとして認められる。

(b) 次に，中学，高校別にその中での男女を比較考察しよう。

中学：（Table 6(a) (b)）

さきにも述べたように，中学男子は，女子に比して問題を，i，自分で解決しようとする傾向が強い。また，iii，あきらめの態度も強い。それに反し，女子は，ii，他人に相談して解決しようとする態度が強い。これを問題別に示すと，次のようである。

男子が女子よりもより，i，自主的に解決しようとする問題

7．ホーム・ルーム
5．将来の方向
10．大人の社会の矛盾

女子がより多く ii，他人に相談して解決しようとする問題

4．先生の指導の仕方
5．ホーム・ルーム
6．先生との話しあい
7．将来の方向
10．大人の社会の矛盾

男子がその解決を iii，あきらめようとする問題

5．ホーム・ルーム
6．先生との話しあい
7．異性の友だち
10．大人の社会の矛盾

以上のように，中学生にあっては，直接学習に関する問題（1，2，3）の解決については，男女の間にあまり著しい傾向の差異を示さないが，その他の問題について，男子は，自分で解決しようとする態度が強く，またより多くあきらめようとするに対し，女子は逆に，他人に相談して解決しようとする態度が強く認められる。

高校：（Table 7(a) (b)参照）

次に，高校における男女を比較すると，中学生と同様男子には自分で解決しようとする態度が強く表われているのに対し，女子は，他人に相談して解決しようとする態度を強く表わしている。しかし，iii，あきらめの態度は，中学生と異なり，男女間に差はない。高校生は全体として男女ともに15〜16%があきらめ的な態度を示している。

高校生の場合，中学生と異なるのは，直接学習に関するの問題（1，2，3）について，女子はより多くそれを他人に相談して解決しようとする態度を示している点である。

また，高校生男子は，4．先生の指導，5，ホーム・ルーム，6．先生との話しあい，10．大人の社会の矛盾などの問題に関して，それは iv，自分の責任でないとする態度を顕著に表わしている。

(3) 悩みの解決をだれに相談するか

以上，悩みの解決の仕方についての結果を考察してきたが，その中，ii，他人に相談して解決する，という解決の仕方の中には，その他人が〝親・友だち・先生・その他〟の中のだれであるかの回答を求めた。これに類する問題は，すでに多くの研究によってたしかめられているわけであるが，(注2) 本研究でも，さらにその点をたしかめようとしたのである。

ここでは，10個の問題ごとに，それぞれ ii，他人に相談して解決する，としたものが，その他人をだれとして選んでいるかの結果を示そう。Table 8

(a) この結果によってみると，全体として，中学生男子は，〝親，先生，その他〟により多く相談し，高校男子は，〝友だち〟により多く相談相手を求めている。また，女子は，中学では〝親〟を，高校では〝友だち〟を相談相手とすることは，男子と同様であるが，〝先生その他〟については差がない。

(b) 次に，男子と女子を比較すると，中学女子はより多く〝親，友だち〟に相談相手を求め，中学男子はより多く〝先生，その他〟に相談相手を求めている。中学男子が，中学女子よりもより多く〝先生〟に相談相手を求めることはやや意外であるが，この傾向は，問題ごとについてみても認められる傾向である。

(c) 問題別にみると，だれを相談相手にするかということは，問題によって著しく異なっていることがわかる。

中学生についてみると，7．将来の方向や，9．人生の生き方，10．大人の社会の矛盾などは，その解決を〝親〟に相談して求めようとする傾向が男女に共通してみられる。しかし中学生も，1上手な勉強の仕方や，4．先生の指導の仕方，5．ホーム・ルームの問題，8．異性の友だちなどの問題は，男女ともその解決を〝友だち〟に求めようとする傾向が強い。

注2 依田新　久世敏雄　青年―両親関係　心理的離乳その1，その2，名古屋大学教育学部紀要　第3，4巻，1957，1958
大西誠一郎　久世敏雄　青年―両親関係　心理的離乳その3，同上紀要　第5巻，1959

Table 8 悩みの解決を相談する相手

	問題番号	中学 親	中学 友だち	中学 先生	中学 その他	高校 親	高校 友だち	高校 先生	高校 その他
男子	1	17.9	43.6	20.5	17.9	1.2	73.5	16.7	8.6
	2	21.7	36.2	25.3	16.9	7.6	62.0	21.7	8.7
	3	49.1	33.3	10.5	7.0	14.3	67.3	8.2	10.2
	4	9.2	46.2	37.6	6.9	4.5	71.9	22.6	1.0
	5	4.1	63.3	30.6	2.0	1.0	88.6	9.5	1.0
	6	23.6	43.8	29.2	3.4	10.9	56.9	29.2	2.9
	7	60.1	13.5	20.9	5.5	52.2	25.7	16.7	5.4
	8	10.5	78.9	10.5	0	2.7	94.5	0	2.7
	9	57.0	14.7	19.2	9.0	39.6	39.2	13.6	7.5
	10	52.6	27.8	10.3	9.3	29.6	55.6	6.7	8.0
計		33.1**	35.6	22.7** (**)	8.9** (**)	21.6	57.0**	16.0	5.4
女子	1	14.3	51.6	15.9	18.3	5.1	64.1	17.9	12.8
	2	41.8	25.3	20.3	12.7	7.7	52.3	33.8	6.2
	3	43.1	37.3	7.8	11.8	19.1	66.0	6.4	8.5
	4	7.6	61.4	26.6	4.4	11.3	63.3	25.3	0
	5	7.1	75.3	14.4	3.5	6.4	87.2	6.4	0
	6	28.4	42.1	27.4	2.1	25.0	48.9	22.7	3.4
	7	75.3	9.7	13.0	1.9	53.5	25.0	18.0	3.5
	8	9.5	79.4	9.5	1.6	3.8	92.3	1.9	1.9
	9	70.0	17.9	10.0	2.1	34.6	43.6	9.0	12.8
	10	51.8	37.5	8.0	2.7	32.1	54.1	8.3	5.5
計		37.3** (*)	41.1 (**)	15.9	5.7	24.2	53.8**	16.3	5.7

備考 *，**は，（中学—高校）について比較し，
(*)，(**)は，中学，高校それぞれ（男子—女子）について比較してある。

高校生は，一般に〝友だち〟を相談相手とする傾向の強いことは上に述べたとおりであるが，7．将来どういう方向へ進めばよいかという問題だけは，男女とも〝親〟を相談相手として求めている。また，9．人生の生き方や，10．大人の社会の矛盾の解決に対しても，30〜40%が〝親〟を相談相手として求めている。高校生は高校生として親の力を評価し，人生，社会に対する悩みの解決の協力者として〝親〟を求めていることは，注目されてよい点である。

4．悩みの重大さと，解決の仕方との関係

これまで，一方では悩みの問題に対する重大さをしらべ，他方ではその解決の仕方はどのようになされるかを考察してきた。そして，今までは，その両者を別々に考察してきたけれども，次にはその両者を組みあわせて考察することにする。すなわち，10個の問題は，それぞれの生徒が，そのどれを重大だと考えるかは一定ではない。しかし，ある問題に対して，それを重大だと考えているものと，それをあまり重大だと考えてないものとの間には，その問題の解決の仕方において異なった傾向を示すのではないかと予想される。その問題を重大だと考えている人は，その問題に対して自主的な解決の態度をとるのか，それともより依存的な態度をとるのかということが問題である。

この点を検討するために，10個それぞれの問題に対して，順位1，2，3位のいずれかをつけたもの（かりに上位群とよぶ）と，8，9，10位のいずれかをつけたもの（下位群とよぶ）との間に，解決の仕方の上で差異があったかどうかを見たのである（x^2検定）。その結果を示すと，Table 9のごとくである。

Table 9 悩みの重大さと解決の仕方との関係
上位群と下位群の分布の検定（x^2検定）

問題番号＼学校男女	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子
1				
2				
3				
4				
5	*	*		* *
6				
7	* *	*		
8	* *	* *		
9				*
10	*		*	

(a) この結果でみると，中学生は男女とも，高校生よりも，悩みの重大さと解決の仕方との間に，より多くの相関があることがわかる。ある問題を重大だと考えるものと，それをあまり重大でないと考えるものとの間にある解決の仕方の違いが，中学生の方がいっそう顕著なのである。さてそれでは，どのような面で違いがあるのか，解決の仕方ごとに検討しよう。

(b) ここでは，各問題の解決に関して，その問題を重大だとするもの（上位群）と，あまり重大でないとするもの（下位群）が，それぞれ4つの型の解決の仕方のどれをえらんでいるかをしらべ，その比率を比較することにする。次には，その検定結果だけを示すことにする。Table 10，したがって，たとえば，中学男子，問題5，解決の仕方 1の**は，中学男子において，5．の問題を重大だとしたものが，i，（自分で解決する）をえらんだ比率と，その問題を重大でないとしたものが

Table 10　上位群と下位群の解決の仕方についての比率の差の検定

問題番号 ＼ 学校男女 / 解決態度	中学男子				中学女子				高校男子				高校女子			
	i	ii	iii	iv	i	ii	iii	iv	i	ii	iii	iv	i	ii	iii	iv
1									*	(**)						
2										(*)						
3																
4									*							
5	**	(*)			*	(*)										(**)
6										(*)						
7	**	(**)			*	(*)			*	(*)						
8	*	(**)														
9																
10	*			*					(*)							

注　1.　*，**印は，上位群の比率＜下位群の比率，を示す（有意差5％，1％）
　　2.　( )印のあるものは，上とは逆に，上位群の比率＞下位群の比率，を示す。

同じく i，をえらんだ比率を比較して，後者（下位群）が有意に高いことを示している。

この結果によってみると，中学男子と高校男子には，その関係がかなりはっきり表わされている。すなわち，ある問題を重大だとしたものの解決態度は，ii，他人に相談して解決する方向をとり，逆に，その問題をあまり重大でないとしたものの解決態度は，むしろ i，自分で解決するという態度を示していることがわかる。

青年期は一般に，自主独立を獲得する時期だといわれるけれども，それもただ一義的にいうことのできない性質のものであることがわかる。高校においても，それを重大な問題だと意識するものは，その解決をむしろ他人に相談してかかろうとするのである。それに反し，その問題ををあまり重大でないとするものは，その解決をむしろ自分できめようとしている。単に自主的であり，依存的であるとする前に，その問題の重大さをどのように意識しているかということが，もっと問題なのである。

そして，そのような違いの表われる問題が，高校男子には，1．勉強の仕方や，2．成績の悪い科目，の問題に表われることも興味ある点である。中学と高校では，学習に関連する問題を〝重大〟だと意識するとき，そこには質的な差異が含まれているのかも知れない。

(c)　女子については，悩みの重大さと解決の仕方との関係について，男子ほど顕著な差異を示さない。女子は中学も高校も，その問題が重大だといっても，その解決の仕方まで含めていないといえるのかも知れない。

3.　学校種別による検討

次に，学校種別によって，悩みの問題に対する重大さについて，どのように異なっているか，さらに，悩みの解決の仕方に相違があるかどうかを検討しよう。学校種別による差違を比較するためにえらんだ学校は，次のとおりである。（Table 1 参照）

岐阜市：普通課程高校，工業高校，定時制高校，
　　女子商業高校

浜松市：進学率のもっとも高い普通課程K高校，
　　進学率の低い普通課程M高校

なお，これらはすべて高校2年生のみを対象としている。その人数は，Table 1に示したとおりであるが，ここでは，(1)　悩みの問題に対する重大さについてと，(2)　悩みの解決の仕方について，学校種別による比較をしたい。Table 11，(a)，(b)，(a′)，(b′)

(1)　悩みの問題に対する重大さについての比較

(a)　ここに示された結果は，さきに名古屋市内の高校生についてみた結果と，全般的には，きわめてよく似た傾向を示している。すなわち，1．上手な勉強の仕方や，2．成績の悪い科目，3．勉強する気になれない，という直接学習に関連する問題を重大だと考えることは共通であり，さらに，7．将来の方向や，9．人生の生き方の問題なども，重大なものとして意識されている。

それに反し，4．先生の指導の仕方，5．ホーム・ルームの問題，6．先生との話しあい，8．異性の友だちがえられない問題などは，あまり重大なものとして意識されていないのである。

(b)　ただ，学校種別によってみると，いくぶん傾向の差異がみられる。

岐阜市内高校についていうと，工業高校男子は，2．成績の悪い科目のことを重大視することが目立ち，普通課程男子は，7．将来の方向の問題を，他の2校に比し

Tabl 11　学校種別による悩みの問題に対する重大さについての比較（%）

(a) 岐　阜　　(b) 岐阜・検定結果

問題番号	男子 普通 N=101	男子 工業 N=211	男子 定時制 N=54	女子 女子商業 N=203	女子 定時制 N=99	男子 普通—工業	男子 工業—定時制	男子 普通—定時制	女子 商業—定時制
1	44.6	40.3	44.4	55.7	51.5				
2	44.6	59.2	42.6	59.6	59.6	≪	>		
3	54.5	56.4	50.0	61.1	66.6				
4	10.9	12.8	7.4	6.4	4.0				
5	4.0	5.7	3.7	2.5	6.1				
6	4.0	10.0	11.1	4.4	6.1	<		<	
7	65.3	50.2	44.4	56.7	37.4	≫		≫	≫
8	8.9	11.4	13.0	6.4	0				>
9	31.7	34.6	37.0	27.1	30.3				
10	20.8	20.4	25.9	19.2	36.4				≪

(a′) 浜　松　　(b′) 浜松・検定結果

問題番号	男子 普商K N=256	男子 普通M N=203	女子 普通K N=51	女子 普通M N=54	男子 普通K—普通M	女子 普通K—普通M
1	49.6	39.9	49.0	37.0	>	
2	50.4	45.3	56.9	42.6		
3	59.0	58.6	56.9	66.7		
4	10.9	9.9	3.9	3.7		
5	7.4	6.9	15.7	3.7		>
6	3.9	6.9	3.9	1.9		
7	46.9	68.5	60.8	68.5	≪	
8	8.2	5.9	3.9	1.9		
9	39.1	40.4	33.3	51.9		<
10	22.3	18.2	17.6	24.1		

て重大だと考えていることが目立つ。

女子については，商業課程の生徒の方が，定時制のものよりも，7．将来の方向，についてをより重大なものと考え，逆に，10．大人の社会の矛盾や不合理という点については，定時制高校女子の方がより重大なものと考えている。定時制女子の生徒は，すでに職場にあって大人と接触することが多く，その問題をいっそう重大なものと考えていることはうなづける。

(c) 次に，浜松市内高校についてであるが，このM・K両校は，上級学校進学率の差異という観点から取り出したのであるが，ここではあまり顕著な差を示さない。進学率の高いK校男子方が，1．勉強の仕方のわからないことをより重大と考え，逆に，7．将来の方向の問題は，進学率の低いM校生徒の方がより重大だと考えている。

女子については，2つの問題でそれぞれ逆の傾向を示しているが，その他の点に関しては，あまり顕著な差異を示さない。

(2) 悩みの解決についての学校種別比較

次には，悩みの解決の仕方が，学校種別についてどう異なるかを検討しよう。

岐阜市内高校についての比較：

(a) まず，悩みの解決の仕方については，男子と女子とを全般的に比較しよう。

悩みの解決の仕方については，男女の間にかなり異なった傾向のあることが認められる。すなわち，男子は一般に，悩みを i，自分で解決しようとする態度を強く表わしているが，女子はむしろ ii，他人に相談して解決し

Table 12　(a) 悩みの解決の仕方についての学校種別比較（岐阜）

問題番号＼解決態度	男子 普通 N=101					男子 工業 N=211					男子 定時制 N=54				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1	48.5	39.6	10.9	1.0	0	54.0	36.0	9.0	0.9	0	52.7	38.2	5.5	0	3.6
2	54.5	25.7	18.8	1.0	0	63.5	14.2	21.3	0.9	0	64.8	7.4	20.4	0	7.4
3	67.3	8.9	22.8	1.0	0	66.8	14.7	15.2	2.8	0.5	75.9	13.0	9.3	0	1.9
4	11.9	39.6	30.7	16.8	1.0	11.8	37.9	21.8	27.5	0.9	20.4	33.3	22.2	18.5	5.6
5	26.7	21.8	34.7	12.9	4.0	27.5	19.0	31.8	20.9	0.9	34.5	25.5	27.3	7.3	5.5
6	25.7	31.7	31.7	5.9	5.0	30.3	21.8	30.3	15.2	2.4	35.2	24.1	35.2	1.9	3.7
7	37.6	61.4	1.0	0	0	33.2	64.5	1.4	0.5	0.5	43.6	52.7	1.8	0	1.8
8	58.4	16.8	14.9	5.9	4.0	49.3	16.6	20.9	10.0	3.3	50.0	22.2	20.4	1.9	5.6
9	44.6	46.5	7.9	0	1.0	38.9	54.5	5.2	1.4	0	60.0	36.4	1.8	0	1.8
10	25.7	24.8	24.8	23.8	1.0	18.5	26.1	21.8	33.6	0	44.4	20.4	24.1	9.3	1.9
計平均	40.1	31.7	19.8	6.8	1.6	39.5	30.5	17.9	11.4	0.7	48.2	27.3	16.8	3.9	3.9

問題番号＼解決態度	女子 商業 N=203					女子 定時制 N=99				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1	37.9	58.1	3.9	0	0	50.5	40.4	9.1	0	0
2	58.1	24.6	17.2	0	0	61.6	21.2	14.1	1.0	2.0
3	75.9	13.8	10.3	0	0	64.6	19.2	14.1	0	2.0
4	9.9	56.2	13.3	19.7	1.0	18.2	52.5	14.1	12.1	3.0
5	35.0	28.6	31.0	4.9	0.5	35.0	32.0	23.0	5.0	5.0
6	31.5	39.9	22.7	5.4	0.5	33.3	28.3	33.3	0	5.1
7	26.1	73.4	0.5	0	0	31.0	63.0	1.0	2.0	3.0
8	27.6	28.1	31.5	8.9	3.9	35.4	25.3	29.3	3.0	7.1
9	46.8	50.7	2.0	0.5	0	31.0	63.0	3.0	0	3.0
10	21.2	36.5	17.2	24.6	0.5	23.2	46.5	15.2	14.1	1.0
計平均	37.0	41.0	15.0	6.4	0.6	38.4	39.1	15.6	3.7	3.1

ようとする態度を強く表わしている。このことは，さきに中学，高校の男女を比較したときにも認められた傾向であるが，高校2年だけをとってみても，その傾向はみられる。

(b) 次に，男子，女子をそれぞれ別々に比較しようまず，男子には，i，自分で解決しようとする自主的な態度の強いことは，共通に認められる点であったが，その傾向は，とくに定時制高校において強く表われている。定時制高校にあっては，全体として，ii，他人に相談して解決するというのが27.3%であるのに対し，i，自分で解決するというのが48.2%を占めている。勤労に従事しているということが，困った，悩みの問題に直面してそれを自主的に解決しようとする態度を形成するのであろうか。

なお，普通課程の生徒は，2．成績の悪い科目のあった場合，より多く，ii，他人に相談して解決しようとし3．勉強する気になかなかなれないというのは，iii，あきらめようとする態度の強いことが特長あるものとして認められる。

工業高校については，とくにそれは，iv，自分の責任でない，とする態度の強いのが目立つ。4．先生の指導について，5．ホーム・ルーム，さらに，10．大人の社会の矛盾の問題についてその傾向が強い。9．人生の生き方について，工業高校の生徒が，ii，他人に相談して

(b) 検 定 結 果 （岐阜）

問題番号＼解決態度	男子														
	普通－工業					普通－定時制					工業－定時制				
	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
1															
2		(*)					(**)								
3								(*)							
4				*											
5														(*)	
6				*										(**)	
7															
8															
9											**	(*)			
10						*			(*)		**			(**)	
				**		**					**			(**)	

問題番号＼解決態度	女子				
	商業－定時制				
	i	ii	iii	iv	NR
1	*	(**)			
2					
3	(*)				
4					
5					
6		(*)	*		
7					
8					
9	(**)	*			
10				(*)	

(*), (**) 印　普通＞工　業
普通＞定時制
工業＞定時制
商業＞定時制
を示す。

（ ）のないものは，その逆（たとえば，普通＜工業）を示す。

道を開こうとする意欲の強くうかがえることも，一つの特長である。

定時制高校については，9．人生の生き方や，10．大人の社会の矛盾に積極的に取り組もうとする態度がうかがえる。

(c) 次に，女子は，女子商業と定時制高校の2校についての比較である。女子は，他人に相談して解決しようとする態度の強いことは，一般に認められた傾向であるが，そのほかに，商業課程の女子は，3．勉強する気になかなかなれない，という問題や，9．人生の生き方に対して，自分で解決しようとする態度を強く表わし，1．勉強の仕方や，6．先生との話しあいについては，むしろ他人に相談して解決しようとする態度を強く表わしている。他方，定時制高校の女子においては，6．先生との話しあいの問題について，iii，あきらめようとする態度の強いのが目立つ。

浜松市内の高校についての比較：Table 13 (a), (b)

(a) まず，男子と女子を全般的に比較してみよう。男子はここでも，i，自分で解決する，という態度が優勢であるが，女子は必ずしもそうでない。ことに，M校女子は，ii，他人に相談して解決するという態度を顕著に表わしている。

(b) 次に男子，女子をそれぞれ別々に比較しよう。

Table 13　悩みの解決の仕方についての学校種別比較（浜松）

		K 校 N=257					M 校 N=203					検定結果・K校 — M校				
		i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
男子	1	66.4	30.9	2.3	0.4	0	57.1	39.9	0.5	2.5	0	(*)	*			
	2	84.8	7.0	7.8	0.4	0	72.9	16.7	9.9	0.5	0	(**)	**			
	3	82.4	9.0	8.2	0.4	0	69.5	20.0	9.9	0.5	0	(**)	**			
	4	22.3	38.7	24.2	14.8	0	14.3	45.8	16.7	23.2	0	(*)			*	
	5	28.5	23.8	37.1	9.8	0.8	16.3	24.6	39.4	19.1	0	(**)			**	
	6	27.0	23.0	32.0	15.2	2.7	33.5	28.6	26.6	11.3	0					
	7	54.7	44.1	0.8	0	0.4	36.5	62.6	0.5	0.5	0	(**)	**			
	8	40.2	17.2	31.2	7.4	3.9	44.8	30.5	17.7	6.9	0		**	(**)		
	9	61.7	32.0	3.1	2.7	0.4	45.8	51.2	2.5	0.5	0	(**)	**			
	10	24.6	26.2	25.4	23.8	0	17.7	32.5	25.1	24.6	0	(*)				
計平均		49.3	25.2	17.2	7.5	0.8	40.8	35.2	14.9	9.0	0	(**)	**			
		i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR	i	ii	iii	iv	NR
女子	1	49.0	51.0	0	0	0	35.2	64.8	0	0	0					
	2	78.4	15.7	5.9	0	0	53.7	40.7	5.6	0	0	(**)	**			
	3	86.3	9.8	3.9	0	0	64.8	22.2	13.0	0	0	(*)				
	4	5.9	64.7	17.6	11.8	0	9.3	53.7	18.5	18.5	0					
	5	13.7	47.1	35.3	3.9	0	27.8	33.3	29.6	9.3	0					
	6	17.6	39.2	39.2	3.9	0	33.3	25.9	33.3	7.4	0					
	7	35.3	64.7	0	0	0	25.9	74.1	0	0	0					
	8	37.3	27.5	23.5	5.9	5.9	33.3	37.0	27.8	1.9	0					
	9	49.0	49.0	0	2.0	0	35.2	64.8	0	0	0					
	10	19.6	39.2	23.5	17.6	0	18.5	44.4	20.4	16.7	0					
計平均		39.2	40.8	14.9	4.5	0.6	33.7	46.1	14.8	5.4	0					

(*) 印は　K校>M校を示し，
( ) 印のないのは，その逆の関係を示す。

男子では，K校が　i，自分で解決する，態度が有意に強いのに対し，M校では，ii，他人に相談して解決する，という態度がかなり強く残っている。

そして，そのことは，個々の問題についてみても明らかに認められるのであって，K校は8個の問題についてより多く i，自分で解決しようとする態度を示すのに対し，M校は6個の問題についてより多く ii，他人に相談して解決しようとする態度を示している。

K校は，浜松市内にあって進学率の高い普通課程の高校であるが，進学率の高い高校の生徒が，進学率の低い学校の生徒に比して，悩みの問題に対する解決の仕方に違いがあるということは，興味ある点である。それがどのような要因によっているかについては推測するだけにしかすぎないけれども，学校生活全般に対する意欲のちがいのよなものがあって，それがいろいろな悩みの問題に対する解決の仕方に影響するのであろうか。

(c)　次に，女子については，K校とM校との間に，男子ほど顕著な差異が見出されない。女子の場合，K校では，2．成績の悪い科目がある場合や，3．勉強する気になれないというごとき場合に，自主的に解決しようとする態度がより強く表われている。M校では，2．成績の悪い科目があるとき，とくに依存的な態度で解決しようとする傾向が強く表わされている。

しかし，全体として，K校女子では，　i，の解決の仕方と，ii，の解決の仕方とで，比率の上ではほとんど差がないが，M校では，ii，他人に相談して解決するという態度が目立っている。

女子は男子よりも一般に，他人に相談して解決しよう

とする態度が強いが，女子同志を比較してみると，進学率の低い高校の女子の方が，その傾向をいっそう顕著に示している。

Ⅳ　要約と今後の問題

以上，現代の学校生活が，青年の人格形成の上にどのような役割を果たしているかの問題を追究するために，昨年来研究をつづけて来た。そして昨年度は，現代の中学，高校生が，学校生活の中でどのような点に問題を感じているのか，いわばなにに悩み，なにに困っているかの実態を明らかにした。そしてその中から，中学，高校男女を通じてほぼ共通した問題をもっていることがわかったが，本年度はそれを手がかりとして，さらに次の点を明らかにしようとして研究が進められた。すなわち，

(1)　悩みを感じている問題を10個にまとめたが，その中なにをもっとも重大だと考え，どの問題は重大だと考えていないかを知ろうとした。

(2)　さらに，それら悩みを感じている問題に対して，かれらはそれをどのような姿勢で解決しようとしているか。

(3)　また，ある問題を重大だと考えることと，その問題の解決の仕方との間には，どのような関係があるのか。

以上，3つの点を中心としたが，考察は，中学，高校学年，男女ごとの比較や，さらに，学校種別ごとによる比較を行なった。そのため調査対象としては，名古屋市内の中学校ならびに普通課程の高校を対象とするほか，岐阜市内においては，普通課程の高校ならびに工業高校，定時制高校，女子商業高校をえらび，浜松市内においては，同じく普通課程であるが，進学率のもっとも高い高校と逆にその率の低い高校とをえらんだ。

なお，方法はすべて質問紙法によったのであるが，ここで得た結果は，およそ次のごとくまとめることができる。

(1)　10個の問題に対して，なにを重大だとするかということは，中学，高校の間にかなり共通した傾向がみられる。すなわち，上手な勉強の仕方や，成績の悪い科目があってこまること，さらに，勉強する気になかなかなれないなど，直接学習に関連する問題はもっとも重大だとされている。それに反し，ホーム・ルームや，先生との話しあい，異性の友だちが得られない問題などは，比較的共通して重大だと考えられていない問題であることがわかる。

(2)　しかし，中学，高校における男女を比較してみると，直接学習に関連する問題は，男子よりも女子の方がより重大だと考えている。それに反し，男子は，将来の方向や人生の生き方の問題などに関しては，より重大だと感じている。

(3)　中学と高校とを比較した場合，中学の方が高校より重大だとしている問題は，上手な勉強の仕方や，成績の悪い科目があって困ること，さらに，先生の指導についての問題等である。それに反し，中学より高校へ進むにつれてより重大だとしている問題は，将来の方向や，人生の生き方についての問題である。

この傾向は，学年ごとに比較しても，ほぼ共通にみられる傾向である。

(4)　悩みの解決の仕方は，10問題に共通して，4つの型についてその回答を求めた。

まず，中学，高校の間には，解決の仕方について差異を認めることができる。すなわち，中学生は，自分で解決するという態度と，他人に相談して解決するという態度とがほぼ等しい割合で示されているが，高校になると，他人に相談しようとする態度よりも，自分で解決しようとする態度をより強く示している。もちろんそれは問題によってわかれ，問題によっては中学生もより自分で解決しようとする問題もあれば，高校生もより多く他人に相談して解決しようとするものもある。

(5)　悩みの解決の仕方を男女別に比較すると，男子は中学，高校ともに，他人に相談するよりもより多く自分で解決しようとする態度を示し，女子は逆に，自分で解決するよりも他人に相談して解決しようとする態度の方が顕著である。男子はより自主的であり，女子はより依存的であるという傾向が認められる。

(6)　また，全体として男子に顕著にみられる傾向は，中学男子にあっては，あきらめようとする態度が強く表われ，高校男子にあっては，それは自分の責任でないとする態度が強く表われる。

もちろん，解決の態度は問題によって異なるので，女子にも，自分で解決しようとする問題もあり，男子にもより多く他人に相談して解決しようとする問題もある。

(7)　悩みの解決を他人に相談する場合，中学，高校ともに，友だちが第一位であり，親は第二位に位置しているが，高校に進むにつれて，男女とも，友だちを相談相手とする傾向はいっそう強く表わされる。もちろん，問題ごとにみると，その相談相手は問題によって異なり，高校生も，将来の方向というような点になると親を相談相手として求めている。

(8)　悩みの重大さと解決の仕方との関係についても，一義的な差異の傾向が見出された。すなわち，ある問題を重大だとしているものの解決態度は，それをあまり重

大だと考えていないものに比して，より多く他人に相談しようとする方向をとり，逆に，その問題をあまり重大だとしていないものの解決態度は，むしろより多くそれを自分で解決しようとする態度を示している。そしてこの傾向は，高校男子が，直接学習に関連する領域の問題においてとくに表わしている。女子には，悩みの重大さと解決の仕方との間では，男子ほど顕著な差異を示さない。

(9) 学校種別によってみると，全般的にはあまり顕著な差異がない。部分的に差異が示され，男子にあっては普通課程の男子が，女子にあっては商業課程の女子が，将来の方向の問題を比較的重大なものと考えている。また，定時制女子には，大人の社会の矛盾や不合理を指摘するものが多い。

同じ普通課程の高校にあって，進学率のちがいに関連しては，あまり顕著な差異を示さない。進学率の高い高校では，勉強の仕方のことを，別の高校では，将来の方向の問題をより重大だと考えている。

㈢ 悩みの解決の仕方についても，一般には顕著な差異を示さないが，定時制高校にあっては，問題を自分で解決しようとする態度の強いのが目立っている。また浜松市内の高校で，進学率の高い学校の方が，問題を自分で解決しようとする態度を，いっそう強く表わしている。

以上，現代の中学，高校生が，学校生活の中で体験する問題の中，なにを重大だとし，また，なにを重大だとしないか，また，それらの問題に対してどのような解決態度を示すかを明らかにすることができた。

また，問題解決の態度としては，中学よりも高校が，女子よりも男子がより自主的に解決しようとすることも明らかになった。しかしその態度は問題によっていろいろ異なり，単に依存か自主という二分法だけでは解決しえないものであることを教えている。また，その問題を重大だと考える者は，その解決を他人に相談しようとする傾向の強いことも，反省させられる点である。重大であると感ずれば感ずるほど，その解決を自分一人の立場だけでなく他人に相談しようとする態度のうかがえることは，生徒を指導するものの立場からは，十分留意されねばならない点である。

なお，今回の報告には，資料の分析の上でも今後に残された問題がある。現在までの整理は，学年，男女別等について行なって来た。しかしその反応を個人中心に考えることはしなかった。たとえばあるものは，いつも問題を自主的に解決しようとしているが，他のものはいつも依存的であるという差異があるはずである。資料は，個々人の反応の型を求める形で整理しなかったけれどもそのような観点から考察するならば，さらに個人に対する指導の指針も得られるのではないかと思う。

さらに，今回の研究は，それが青年期の人格形成の上にどのように結びつくかについては，十分検討することができなかった。しかし，この結果は，現代の中学，高校生が，いかに多く学習のことに関心を集中しているかを示しえたのである。そして同時に，高校生になると，学習のみの問題でなく，広く将来の方向や，人生の生き方に眼を向けつつあることも明らかにされたのであるが，現実には，その一方をおさえて学習という面に焦点づけることを強いられているのである。学校生活はもっと広く人格形成の場でなければならないし，教師や友だちとの人間的接触，さらにホーム・ルームや人生の問題に対する態度を確立して行かねばならないのである。そうした要請にかかわらず，あるものは狭い視野にだけ眼を向けて学校生活を送っているのである。そのような生活の中で，どのように人格が形成されて行くかは，さらに大きな問題として残されている。

後記

この研究を進めるにあたって，名古屋市，浜松市，岐阜市内の多くの中学校，高等学校が積極的な協力を与えられたことに対して，深く感謝の意を表したい。そのほか，本学ならびに静岡大学，岐阜大学，名古屋女子大学の研究室からも数々の援助をいただいた。ともに記して厚く感謝の意を表したい。

（1966年10月）